

## 【優秀賞】

# 爪白癬からの感染予防

～整形外来での爪ケアの取り組み～

佐倉〈ゆうゆうの里〉診療所  
○倉本陽子 上條光子

### 【目的】

爪白癬は、高齢者に多い白癬菌による爪の疾患である。佐倉施設の整形外科外来では平成 25 年から爪のケアを実施している。しかし平成 28 年 5 月、2 名の入居者が白癬菌による爪の炎症や蜂窩織炎(ほうかしきえん)を発症し、外部受診や点滴治療が必要となった。そのため、医師による爪切りと看護師による爪ケアに加え、検査により診断を確定し、治療につなげることで、爪白癬からの感染を予防していく事を目的に取組んだ。

### 【方法】

爪白癬についての勉強会を実施

爪ケアシートを作成、写真を撮り、爪の状態を評価していった。

受診から治療までは以下の方法をとった。

- ① 診療所整形受診時、爪切り直前に足浴をする。
- ② 整形医師による爪切り後、白癬菌検査提出。
- ③ 看護師は爪の角質除去や、爪にやすりをかけ整える。
- ④ 検査結果が白癬菌陽性の時、医師の指示で入居者同意の元、治療（クレナフィン爪外用液）を開始する。
- ⑤ 看護師は1週間に1回爪の状態を観察し、治療開始1か月後に再診とする。

### 【結果】

- ・平成 28 年 5 月から白癬菌検査開始  
17 名に検査実施し白癬菌陽性者は 10 名(58%)であった。そのうち炎症ある 2 名と予備軍 3 名に治療開始した。
- ・治療開始した 5 名は現在も炎症をおこしていない。
- ・爪シートを作成したことで、経過がわかりやすく、又治癒を妨げる要因を考えるきっかけにもなった。
- ・入居者からは「足浴が気持ち良い」「日常の爪切りでは切りにくかった部分を専門的に処置してもらうのは気持ちがいい」等の声が聞かれた。
- ・爪の処置による診療報酬が増加した。

### 【考察】

「爪白癬」の診断を確定し、治療に結びつけ、その後も定期的にフォローしていったことで感染の再発を防ぐことができた。

皮膚科等の外部受診も不必要となり、入居者本人、介護職員の負担軽減につながった。

### 【結論】

感染を予防するには、足・爪の観察を十分行い、治療の必要性がある時は早期に医師に相談していくことが大切である。今後も爪ケアシートを活用し、感染の兆候を見逃さないようにしたい。

入居者・介護職員とも爪の肥厚(ひこう)・変形のため爪切りができずに困っている。不穏になりがちな入居者も多く、限られた診療時間内で足浴をし、爪切りにスムーズにつなげることが課題である。

## 【優秀賞】

# 「見えるものすべてがサービス」

～ゴミの見えない環境を目指して～

伊豆高原〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課

○深澤智香 伊藤佐代子 野上弘美

### 【目的】

ケアセンターでは、使用済みオムツは、新聞紙に包み、居室から1番近いゴミ箱に捨てる事になっている。ゴミ箱はケアセンター内に6カ所設置してあるが、大半の職員は、「その後の回収が容易であるケアステーション近くのゴミ箱」に捨てる事が習慣となっていた。職員から意見が上がり、課題に感じていたのは、①職員によって、オムツの包み方が雑でゴミ箱から臭いが漏れることがあったこと。また、②オムツをもち運ぶ際の見え目が悪いこと、だった。とくに、②のもち運びに関しては、構造上、入居者が過ごすデイルームを通らなければならず、注意は払っているが、入居者や来里した方が目にすると思われ、今回、「使用済みオムツのもち運び方」を見直す事にした。また、現在設置しているゴミ箱の位置、回収方法などについても検討し、「ゴミの見えない環境」を目指すことで、職員の意識改善にもつながるのではないかと考えた。

### 【方法】

#### (1) データ収集方法

- ① 使用済みオムツのもち運び方法について、職員向けのアンケートを行う。
- ② アンケートの中から良かった方法をいくつか試し、改善策を見出す。

### 【結果】

使用済みオムツのもち運び方や、汚物入れの設置場所に対する衛生面の認識や、お金をもらってサービスを提供しているという意識が十分ではなく、職員の都合を中心に考えており、衛生面や普段生活している入居者や来里した方の視点が不足していた。そこで、比較的往来数が多いケアステーション近くのゴミ箱は撤去。また、使用済みオムツのもち運びについては、見栄えの良いバッグに入れ、汚物入れまで運ぶという方法を採用。最終的な回収については、ダストカーを購入し、衛生面、見た目、運びやすさなども解決された。

### 【考察】

普段から問題意識はあったものの、回収の手間を省くため、なかなか取り組みに至らなかったが、今回、使用済みオムツのもち運び方法、回収方法等を見直す事で、衛生面も向上し、「入居者に目にしてほしくないものは見えにくくする環境づくり」をすることができ、目には見えないが、入居者や来里する方に気持ち良く過ごしていただく事ができる環境が整ったと確信している。

### 【結論】

長年やってきた方法だからそのまま良い、のではなく、「本当にこれでいいのか？」と日常の業務を見直していくことで、今後もよりよい質の環境を目指していきたい。

## 【優秀賞】

# 入居者にも職員にも安全な介助

～ケアサービス課の腰痛対策を振り返り～

佐倉〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課

○齋木浩一 鈴木慧 高橋渉

### 【目的】

厚生労働省の調査によると社会福祉・介護事業における腰痛による労働災害発生状況は、H22年938件からH26年では1023件と毎年増加している。一方、財団では、H20年から腰痛対策プロジェクトを立ち上げ、「職員の健康を守る」ことを目的とし「新規腰痛者0・既存の腰痛者は不安なく仕事ができる」ことを目標に対策を行ってきた。しかし、佐倉施設のケアサービス課の腰痛発生率は他課と比べて高い状況で推移している。今研究ではケアサービス課に焦点を当て、腰痛対策を振り返り、どの程度目標を達成できたか、またこれから解決すべき課題は何かを探りたい。

### 【方法】

- ・ケアサービス課職員（H28年春の腰痛健診時103名）に行ってきた腰痛対策（①腰痛予防体操実施状況、②腰の負担を軽減する福祉用具の導入、③腰痛事故報告状況、④腰痛者の業務配慮、⑤産業医・衛生管理者による職場巡視）について評価する。
- ・全職員向けに、半年に一度行っている腰痛予防健康診断のデータを分析する。

### 【結果】

・これまで行ってきた対策について、①職場で毎日体操を実施していると答えた職員は42.7%（目標100%）と目標未達成。②超低床ベッド、アームレスト跳ね上げ式車椅子、スライディングボード、スライディングシート、介助シート、ペンギンサポートの6種類を導入した。持ち上げない動作により腰への負担を軽減した。③事故報告を分類すると移乗介助が多い。④職場で腰痛者がいれば、腰の負担が高い業務は避けるように、腰痛者に対するフォローはできてきた。⑤職場巡視により、腰痛発生リスクが高い作業環境を6箇所改善した。

・H28年春の腰痛健診の結果は、新規腰痛者3名（2.9%）、再発・慢性腰痛を合わせると17名（16.5%）となった。労災認定となる程の重度な腰痛はH24年度の1件以降発生しなかった。

### 【考察】

なぜ「新規腰痛者0」にならなかったかについては、ケアサービス課では入居者を24時間365日支援するため、職員数も多く、出勤時間が8パターンあり、まとまって体操を行っていない。身体介護が多く腰に負担がかかりやすい。誰もが同じ介助方法を行ったとしても、職員と入居者の体格差により、腰に負担がかかること。1年に1度は移乗介助方法の勉強会を行っているが、腰痛の発生率が高い職員（入職2年以内、50歳代、女性、契約職員）は家庭の事情や勤務の都合により参加率が少ないことが考えられる。

「既存の腰痛者は不安なく仕事ができる」目標については、腰痛が起きてもフォローし合う体制は構築できており、腰に負担の少ない仕事はできている。しかし、腰痛が起こる不安を解消できるような、身体の使い方や介護技術、福祉用具については、まだ改善の余地があると考えられる。

### 【結論】

腰痛による労働災害は4年連続0件となった。重度な腰痛を防ぐことに関して一定の効果があったため、これらの対策は継続していきたい。今後、ケアサービス課の腰痛を防止するためには、身体の使い方や介護技術のバリエーション、腰の負担を軽減する福祉用具の導入が不可欠である。チーフや産業医、衛生委員、理学療法士、福祉用具の担当者等と連携し、腰痛発生0の職場を目指し、取り組みを行っていきたい。

## 【優秀賞】

# 「歩きたい」を叶えたい ～免荷式リフト POPO を活用して～

京都〈ゆうゆうの里〉ケアサービス課  
○稲葉直隆 流郷晋一郎

### 【目的】

京都〈ゆうゆうの里〉ケアセンターの約7割の入居者55名が車いすを使用している。その内、9割にあたる43名が居室外の移動介助が必要である。また7割が居室内の移動介助が必要な状態である。「歩きたい」そのような声や思いに対して、「無理ではないか」、「転倒するのではないか」、「職員の負担が大きい」と、職員も入居者も諦めていた。今年、免荷式リフト POPO を導入し、二つの効果を期待している。一つは、安全・安心かつ職員の負担も軽減し、機能訓練を行い、立位や歩行の安定、転倒防止に期待していること。もう一つは、歩くことを諦めていた方がもう一度「歩く体験」をすることによって、喜びを感じてもらい、QOL 向上や閉じこもり予防を期待していることである。

### 【方法】

#### (1) データ収集方法

- ①入居者の希望、身体面、精神面、認知面を考慮し、対象者を8名選定する。
- ②対象者ごとに目標、頻度を設定する。
- ③実施ごとに状態、発言、表情などを記録する。
- ④3ヶ月ごとに評価を行う。

### 【結果】

選定した対象者8名のうち、プラスの効果として身体機能の向上に効果があった方が1名。活動機会の増加、身体機能の維持として効果があった方が1名。「歩く体験」をしたことで喜ばれ、活動意欲がでた方が1名。表情によい変化が見られた方が1名。マイナス効果として意欲が出ず終了した方が2名。認知面から理解が難しく終了した方が2名。

### 【考察】

身体機能の向上・維持の目的だけでなく、歩けない方に「歩く体験」をしてもらうことで表情や言動から喜びを感じてもらえることがわかった。その反面、精神的に不安定になる入居者もいた。

### 【結論】

免荷式リフト POPO が身体的な機能訓練としての効果だけでなく、心・気持ちを元気にする効果としても有効に活用できることがわかった。今後は、より多くの方に使用し、筋力UPや閉じこもり予防としての効果を検証していく。